様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 4 日現在

機関番号：14701
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520141
研究課題名（和文）クラヴィコードの演奏法を基本としたハイドンのクラヴィーア作品演奏法研究
研究課題名（英文）A Study of the method to play klavier works of Haydn based on the method of playing the clavichord
研究代表者
山名　仁（YAMANA JIN）
和歌山大学・教育学部・教授
研究者番号：00314550

研究成果の概要（和文）：フォルテピアノ、チェンバロ、クラヴィコードの３種鍵盤楽器は、発音原理が全く違うのにもかかわらず､ハイドンが活躍した 18 世紀後半において共に演奏されていたことが知られている。本研究の課題は、この 18 世紀後半の実態に即したハイドンのクラヴィーア作品の演奏法の確立である。３種鍵盤楽器の演奏法と音楽上の着想との関係に言及しながら 11 回行われたクラヴィーア作品全曲演奏会による演奏研究の結果､クラヴィコードの演奏テクニックと音楽上の着想は、ハイドンの全クラヴィーア作品に敷衍されるべきであるという結論に達した。

研究成果の概要（英文）：The Mechanism of sound for these three instruments: the fortepiano, harpsichord, and clavichord is completely different. These three types of keyboards were played often in the late 18th century. Haydn's klavier works were composed in this era. The subject of this study is to establish how to play the klavier works of Haydn suitable to the reality of the late 18th century. For this subject, this researcher used three kinds of keyboards, and performed all the klavier works of Haydn through 11 concerts. As a result, it became clear that clavichord performance techniques and the inspiration for its music are based on all the klavier works of Haydn.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：歴史的鍵盤楽器・演奏法

１．研究開始当初の背景

（１）国内・国外の研究動向

①現代のピアノによるハイドンのクラヴィーア作品の演奏

これまでハイドン鍵盤音楽作品は主として現代のピアノによって演奏されてきた。その演奏法の基本は 19 世紀末ブライトハウプトによって提唱され広まった重力奏法といえよう。その特徴は、手首と腕の脱力によって自然に得られる荷重を効率よく鍵盤に伝達することにある。しかしこの奏法は、19 世紀を通してピアノの鍵盤が次第に深く重くなっていったことに対応するために考案された演奏テクニックである。これまで録音されたハイドンのクラヴィーア作品全集および抄録は現代のピアノによるものが多く、歴史的鍵盤楽器による演奏研究がモーツァルトやベートーヴェンほど一般化していない。

②歴史的鍵盤楽器による演奏

近年歴史的鍵盤楽器奏者による CD 録音も小数ではあるが発表されている。しかしその殆どはフォルテピアノの演奏を主体としたものであり、初期古典派の鍵盤楽器の事情を反映したものであるとは言い難い。例えばスタンリー・ホーホランドらによって Brilliant Classics から 2003 年に発表されたクラヴィーアソナタ全集は、全てフォルテピアノで録音されている。

これに対しクリスティーネ・ショルンスハイムが 2005 年 Capriccio から発表したハイドン全集はチェンバロ、クラヴィコード、フォルテピアノの３種楽器を駆使してレコーディングした点において注目に値する。しかし全 71 曲のうちクラヴィコード７曲、チェンバロ２７曲、フォルテピアノ３７曲の割合となっており、フォルテピアノによる演奏解釈に主眼をおいた演奏であるといえよう。

（２）これまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯

本研究者はこれまでフォルテピアノを中心にハイドンのクラヴィーア作品を研究してきた（2007年4月の5回に渡るＮＨＫ音楽番組「ピアノぴあ」出演等）。しかしフォルテピアノのみの演奏研究で明らかになるのは後期のごく少数の作品のみであるとの感を強くし、チェンバロとクラヴィコードによる演奏研究を開始した。以来発音機構の全く異なる3種楽器の演奏テクニックの相違に違和感を持つと同時に、これら特性の全く異なる楽器を違和感なく演奏していたと考えられるハイドンやその他の古典派の作曲家達の演奏法、つまり3種の楽器の奏法を統括する演奏テクニックの確立の必要性に思い至った。

２．研究の目的

本研究においては以下の３点を目的とした。

（１）ハイドンのクラヴィーア作品に潜在するクラヴィコードの語法

打弦装置であるタンジェントが弦に触れている間だけ音が鳴っているというクラヴィコード特有の発音原理には、演奏者に弦の振動を感じさせるという他の鍵盤楽器にはない特性がある。この特性を充分に意識しつつ演奏することによって得られるアーティキュレーション法、強弱法、ベーブンク（クラヴィコード特有のヴィブラート奏法）等を再検討し、ハイドンのクラヴィーア作品における機能について明らかにする。また同様の視点から様々な速度記号についても再検討し、クラヴィコードの表現力に相応しいテンポ設定を明らかにする。

（２）クラヴィコードの演奏テクニックを基本としたチェンバロやフォルテピアノの演奏法の確立

クラヴィコードは、他の２楽器とは発音原理の違いから鍵盤の軽さや浅さが際立っている。そのためクラヴィコード上では、鍵盤への過度の加重を回避するために腕や手自体の重みを鍵盤へ伝えないための工夫、さらには鍵盤に対する各指の微細な運動が必要とされる。この演奏法の特色がハイドンのクラヴィーア音楽の基本であると本研究者は考える。チェンバロやフォルテピアノによるハイドン作品の演奏法をクラヴィコードの演奏テクニックの視点から再検討し、同一曲で比較検討することによってこれら発音原理の違う鍵盤楽器の演奏法を統合する。

（３）ハイドンのクラヴィーア作品の演奏におけるクラヴィコード中心の歴史観の確立

従来古典派時代は、チェンバロからフォルテピアノへと使用楽器が変化していった時期として捉えられてきた。そのため発音原理の相違（チェンバロは弦をはじき、フォルテ

ピアノは弦を叩く）や強弱法、手の交差による演奏の可否等に議論が集中し、クラヴィコードの演奏法が議論の対象とはならなかった。本研究においては、演奏法の変化をクラヴィコードからフォルテピアノへの移行という視点から捉えなおし、クラヴィコードの腕や手の荷重を利用しない奏法から腕の荷重を利用したフォルテピアノの奏法へと移行する過程を明らかにするとともに、ハイドン作品における移行期が比較的遅いことを明らかにする。

３．研究の方法

クラヴィコード、チェンバロ、フォルテピアノの３種歴史的鍵盤楽器によるハイドンのクラヴィーア独奏曲全曲演奏会全１１回を行い、以下の視点をもって演奏研究を行った。

〇クラヴィコードの語法に則した強弱法、アクセント法、スタッカート奏法、ポルタート奏法、レガート奏法、ベーブンク奏法、テンポ設定の再考

〇クラヴィコードの語法に則したテンポ設定

〇古典派のクラヴィーア演奏法に関する文献の再検討

〇３種鍵盤楽器の演奏法をクラヴィコードの演奏法によって統合

〇クラヴィコードの語法からフォルテピアノの語法への移行期の検討

〇クラヴィコード、チェンバロ、フォルテピアノによる録音制作に相応しい作品の選択

４．研究成果

研究成果としての「ハイドン　クラヴィーア大全」全 11 回の演奏曲目と演奏研究の趣旨について以下に記す（ソナタの番号はランドンによる）。なお各回のプログラムノートについてはここに記すスペースがないため、後述の研究者個人のホームページにて公開予定である。

Vol.1　「フォルテピアノへの転換期から 18 世紀器楽曲の終焉へ」　2009.5.30.　（フォルテピアノ）

ソナタ第 56 番:D、第 62 番:Es、第 10 番:C、第 58 番:C、第 59 番:Es、カプリッチョ:G

〇まずフォルテピアノで演奏することが想定されていたと考えられる作品を採り上げ、第２回以降のクラヴィコードその他の楽器による演奏比較の布石とした。

Vol.2　「クラヴィコードとハイドン」　2009.7.5　（クラヴィコード）

ソナタ第 15 番:E、第 53 番:e、第 44 番:F、第 14 番 C、第 2 番:C、第 48 番:C、アリエッタ第１番:Es

〇クラヴィコードは 20 世紀の音楽事情からかけはなれている性格を持っているために復興の遅れた鍵盤楽器である。そのあまりにも小さな音が商業性とは無縁であったためだ。この音世界を可能とした 18 世紀までの環境とハイドンのクラヴィーア作品との関係性がテーマとなった。

Vol.3　「チェンバロによる響きの再考」　2009.7.26　（チェンバロ）

ソナタ第 9 番:D、第 1 番:G、第 43 番:Es、第 13 番:G、第 50 番 D、アリエッタ第２番:A

〇現代のピアノのレパートリーとしては殆ど採り上げられることのない初期、中期のクラヴィーア作品をチェンバロによって演奏した。一般的には駄作が多いとされているこの時期のクラヴィーア作品がチェンバロで演奏される事によって本来の魅力が再現されること、各曲の特性がいかに現代のピアノと乖離しているかを検証した。

Vol.4　「ハイドンと疾風怒濤」　2009.9.30　（クラヴィコード）

ソナタ第 6 番:C、第 32 番:g、第 35 番:As、第 34 番:D、第 3 番:F、第 33 番:c

〇ハイドンの作品にはまれな短調の作品を採り上げた。18 世紀は理性を重んじる世紀だったが、その後半においては後のロマン派に通じるような感情の発露を目指した芸術運動が生まれた。その気運とハイドンも無関係ではなかった。ハイドン短調の曲には心の奥底に眠る慟哭にも似た衝動的感情が露わとなっている。この激しい感情の動きを表現するために最も相応しい楽器が、静謐の音世界を旨とするクラヴィコードであることを提示した。

Vol.5　「偽作　真作」　2009.10.31　（チェンバロ、クラヴィコード）

ソナタ第19番:e、第57番:F、第21～27番、第49番:cis、第16番:D、第17番:Es、第52番:G
○ハイドンの初期中期作品の中から偽作の可能性の高い作品、二つの作品においてある楽章が丸ごと重複している例、そしてハイドンが作成した自作カタログに数小節のみ記録されている作品を採り上げ、真作と演奏比較した。

Vol.6 「円熟への道のり」 2010.2.7 (クラヴィコード)
ソナタ第7番:D、第30番:D、第33番:c、第36番:C、第46番:E、第55番:B
○1760年代の3楽章による最初期の演奏会様式のソナタ、1773年のエステルハージ・ソナタ、1776年のディレッタント様式のソナタ、1780年代ボスラー・ソナタと年代を追いながらクラヴィコードによって演奏し、どの年代においてもクラヴィコードによる演奏がハイドンのクラヴィーア作品に相応しい事を提示した。

Vol.7 「クラヴィコードで聴くハイドン初期傑作」 2010.4.4 (クラヴィコード)
ソナタ第8番:A 第11番:B 第29番:Es 第31番:As 20の変奏曲:G アダージョ:F アレグレット:G 12のメヌエット
○普段なかなか演奏されることの少ない初期作品のなかに、クラヴィコードで演奏することによって現代のピアノによる演奏とはまったく異なる美しさが顕在化する作品がある。鍵盤楽器の選択によって演奏解釈や演奏の聴き方がまったく変わってしまうことをVol.6を発展させる形で明らかにした。

Vol.8 「強弱記号の不思議」2010.5.22 (クラヴィコードとフォルテピアノ)
ソナタ第20番:B 第40番:Es 第47番:h 第60番:C 第61番:D 12のメヌエット 6つの変奏曲:C ファンタジア:C
○ハイドンのクラヴィーア作品に書き込まれた強弱記号の謎について言及。中期以降の作品においてはじめて現れてくるフォルテやピアノといった強弱記号は果たしてフォルテピアノによる演奏を示唆しているのか、それともクラヴィコードのためのものなのか。クラヴィコードとフォルテピアノの2台の異なるクラヴィーアで演奏することによって、強弱記号にまつわる様々な謎を楽器の特性と関連させながら読み解いた。

Vol.9 「偽作真作 II 」 2010.12.26. (クラヴィコードとフォルテピアノ)
ソナタ第4番:G、第5番:G、第18番:Es、第28番:D、第40番:Es、アンダンテと変奏曲:f、アレグレット:G、教師と生徒:F (連弾) ＊＊賛助出演:松井典子(フォルテピアノ連弾)
○「偽作真作II」では、前回同様偽作に焦点をあて、ハイドンの初期中期作品の中 から偽作の可能性の高い作品、曲の一部分のみ残されている作品、二つの作品においてある楽章が重複している作品を取り上げた。

Vol.10 ハイドンのレトリック 2011.10.16 (クラヴィコードとフォルテピアノ)
第12番:A、第37番:A、第38番:F、第39番:D、第45番:A、第51番:Es、オーストリア国歌《神よ国王を守りたまえ》による変奏曲、12のメヌエット(1792年)
○ハイドンが用いた様々なレトリックのなかでもユーモアのレトリックに焦点を絞り、演奏に反映させる方法について言及した。ユーモアの演出としては、「間」がキーワードとなったが、この「間」はフォルテピアノ、クラヴィコードにおいてそれぞれ有効に機能する事を提示した。

Vol.11 「3種類の鍵盤楽器による聴き比べ」2011.12.27 (チェンバロ、クラヴィコード、フォルテピアノ)
第41番:A、第42番:G、第54番:G、第62番:Es、カプリッチョ:G、6つの変奏曲(1790年)
○「ハイドン クラヴィーア大全」の集大成である。3種類の鍵盤楽器によってカプリッチョ等、同一曲を演奏比較した。前半は考証に基づく楽器選択によって演奏し、後半はハイドンの音楽の本質を顕在化させる楽器の選択によって演奏した(第62番:Esをクラヴィコードによって演奏)。

以上の演奏研究により、以下の結論を得た。
18世紀後半の鍵盤音楽の歴史観をチェンバロからフォルテピアノへの語法の変化と捉えると、L・ションファイ作成、伊藤信宏

訳補筆の「ハイドンのクラヴィーアソナタの類型」によれば 1777 年頃のアウエルンブルガー・ソナタがその移行期となる。これに対し本研究者は 18 世紀後半の鍵盤音楽の歴史観をクラヴィコードからフォルテピアノへの語法の変化と捉え直し、その移行期を探った。研究当初はハイドンの 1790 年代のイギリスソナタがフォルテピアノを想定して作曲されていることから、この少し前にクラヴィコードからフォルテピアノへの演奏テクニックの変換が起きたと予想していた。しかしハイドンのクラヴィーア全独奏曲を公開演奏し終え、クラヴィコードの演奏テクニックあるいは音楽上の着想は、予想に反しハイドンの全クラヴィーア作品に敷衍されるべきであるという結論に達した。その根拠は Vol.11 「3 種類の楽器による聴き比べ」においてクラヴィコードによって演奏されたソナタ第 62 番：Ｅｓに収斂される。このソナタはハイドンのクラヴィーア作品の中でも、最も現代のピアノで演奏するに相応しい作品としてピアニストたちに受け入れられている。しかし今回クラヴィコードによって演奏されたことにより、むしろこの作品の本質である弦楽オーケストラ的側面が顕在化した。これはハイドン自身が持っていたイギリス式のフォルテピアノによって作曲されたのにもかかわらず、彼自身がクラヴィコードで培った演奏テクニック、および鍵盤音楽における作曲法から終生脱却する事がなかったことを意味している。

なおクラヴィコードによるハイドンのクラヴィーア作品の具体的解釈を音源によって示す計画については、録音は既に終了しているものの、その編集が予算不足のため未完の状況にある。今後さまざまな予算獲得を画策し、録音を公開する予定である。なお録音した作品は以下の通りである。

○クラヴィコード、チェンバロ、フォルテピアノの３種楽器による演奏比較の録音として「カプリッチョ:G」

○最もクラヴィコードに相応しい作品として「ソナタ第 33 番：c」

○イギリス式のフォルテピアノが想定されているにも関わらず、その本質はクラヴィコード的である作品として「ソナタ第 62 番：Es」

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１１件）

山名　仁（演奏会では「敏之」）、ハイドン クラヴィーア作品大全（演奏会）、査読なし

Vol.11「3 種類の楽器による聴き比べ」、2011

Vol.10 「ハイドンのレトリック 」、2011

Vol.９ 「偽作 真作 II」、2010

Vol.８ 「強弱記号の不思議」、2010

Vol.７ 「クラヴィコードで聴くハイドン初期傑作」、2010

Vol.６ 「円熟への道のり」、2009

Vol.５ 「偽作　真作」、2009

Vol.４ 「ハイドンの疾風怒濤」、2009

Vol.３ 「チェンバロによる響きの再考」、2009

Vol.２ 「クラヴィコードとハイドン」、2009

Vol.１ 「フォルテピアノへの転換期から 18 世紀器楽曲の終焉へ」、2009

〔学会発表〕（計２件）

① クラヴィコードとハイドン　山名敏之
日本音楽表現学会（2010 年 6 月 13 日、京都女子大学）

② シンポジウム「表現する身体をつくる」
日本音楽表現学会第８回大会　（山名敏之・安藤政輝・佐々木正利・河村晴久）
発題「ピアニストの脳と身体～歴史的鍵盤楽器奏者の立場から～」（2010 年 6 月 12 日、京都女子大学）

〔図書〕（計１件）

①音楽表現学のフィールド　日本音楽表現学会［編］２．西洋クラシック音楽の拍節感にみる二つの異文化（第１部　音楽における異文化受容　第３章　演奏における異文化受容）p.66-75 東京堂出版（2010）

〔その他〕

ホームページ等

http://klavi.info/

６．研究組織

(1)研究代表者

山名　仁（YAMANA JIN）

和歌山大学・教育学部・教授

研究者番号：00314550

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)